



## PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11) Publication number: 03044304 A

(43) Date of publication of application: 26.02.91

(51) Int. Cl

**A01N 47/30****A01N 43/78****A01N 43/80****A01N 57/14**

**//(A01N 47/30 , A01N 43:78 ), (A01N 43/78 , A01N 43:54 ), (A01N 43/78 , A01N 37:08 ), (A01N 43/78 , A01N 43:16 ), (A01N 43/78 , A01N 33:08 ), (A01N 43/80 , A01N 43:78 ), (A01N 57/14 , A01N 47:30 )**

(21) Application number: 01180872

(71) Applicant: TAKEDA CHEM IND LTD

(22) Date of filing: 13.07.89

(72) Inventor: OKAUCHI TETSUO

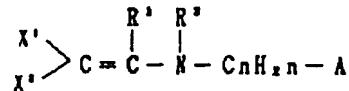
**(54) INSECTICIDAL AND BACTERICIDAL COMPOSITION FOR AGRICULTURAL AND HORTICULTURAL USE**

COPYRIGHT: (C)1991,JPO&amp;Japio

(57) Abstract:

**PURPOSE:** To obtain the subject composition exhibiting synergistic insecticidal and bactericidal activity at a low concentration compared with the separate use of each component and exhibiting excellent quick activity and residual activity by combining an  $\alpha$ -unsaturated amine with a known specific bactericidal compound.

**CONSTITUTION:** The objective composition is produced by combining (A) 1 pt.wt. of a compound of formula (one of  $X^1$  and  $X^2$  is electron-attracting group and the other is H or electron-attracting group;  $R^1$  is group bonded through N;  $R^2$  is H or group bonded through C, N or O; n is 0-2; A is heterocyclic group or cyclic hydrocarbon group), e.g. 1-[N-(6-chloro-3-pyridylmethyl)-N-methyl]amino-1-methylamino-2-nitroethylene and (B) 0.5-50 pts.wt. of a compound selected from pherimzon, fusaride, probenazole, isoprothiolane, kasugamycin hydrochloride, edifenphos, isoprobenphos, tricyclazole, validamycin A, flutranil, mepronil and pencyclone.



## ⑫ 公開特許公報 (A) 平3-44304

⑬ Int. Cl. 5

A 01 N 47/30  
43/78  
43/80  
57/14識別記号 C 6779-4H  
A 8930-4H  
102 8930-4H  
A 7057-4H\*

⑭ 公開 平成3年(1991)2月26日

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全20頁)

⑮ 発明の名称 農園芸用殺虫殺菌組成物

⑯ 特願 平1-180872

⑯ 出願 平1(1989)7月13日

⑰ 発明者 岡内哲夫 大阪府枚方市堤町10番11号

⑯ 出願人 武田薬品工業株式会社 大阪府大阪市中央区道修町2丁目3番6号

⑯ 代理人 弁理士 野河信太郎

最終頁に続く

明希田

## 1. 発明の名称

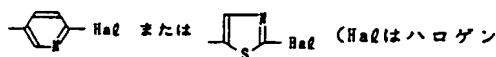
農園芸用殺虫殺菌組成物

## 2. 特許請求の範囲

## 1. (1) 式 [1]



[式中、 $X'$ 、 $X''$ の1つは電子吸引基を他は水素原子または電子吸引基を、 $R'$ は窒素原子を介する基を、 $R''$ は水素原子または炭素、窒素もしくは酸素原子を介する基を、 $n$ は0、1または2を、 $A$ は複素環基または環状炭化水素基を示す。但し、 $R'$ が $\beta$ -N-ビロリジノエチルアミノかつ $R''$ が水素原子である時、 $A$ は式



で表わされる $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩の少なくとも1種と、

(2) (Z)-2'-メチルアセトフェノン-4,6-ジメチルビリミジン-2-イルヒドロゾン、4,5,6,7-テトラクロルフタリド、3-アルキルオキシ-1,2-ベンゾイソチアゾール-1,1-ジオキシド、ジイソプロビル-1,3-ジチオラン-2-イリデン-マロネート、カスガマイシン塩酸塩、O-エチル-S,S-ジフェニルジチオホスフェト、O,O-ジイソプロビル-S-ベンジルチオホスフェート、5-メチル-1,2,4-トリアゾロ[3,4-d]ベンゾチアゾール、バリグマイシンA、 $\alpha$ , $\alpha$ , $\alpha$ -トリフルオロ-3'-イソプロポキシ-0-トルアニリド、3'-イソプロポキシ-2-メチルベンズアニリド、1-(4-クロロベンジル)-1-シクロベン

## チル-3-フェニル尿素

からなる群から選ばれた少なくとも1種の化合物とを含有することを特徴とする農園芸用殺虫殺菌組成物。

## 3. 発明の詳細な説明

## (イ) 産業上の利用分野

本発明は、後記式[1]の $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩と公知の殺菌剤との組合せからなる優れた殺虫殺菌作用を示す新規な農園芸用殺虫殺菌剤に関する。

## (ロ) 従来の技術

従来から、農園芸用の殺虫剤として各種の薬剤、例えば有機リン系、カーバメート系、ビレスロイド系等の多くの薬剤が開発され、単剤及び混合剤として使用されてきた。しかし、従来の殺虫剤は殺虫スペクトル、害虫の各発育段階での殺虫活性、速効性、残効性、浸透移行性等のバランスを欠いたり、また殺虫効果面では優れていても魚類に対する毒性、あるいは有用昆虫や天敵等に対する安

種苗の機械移植が広く普及し、これにともなって従来の水田本圃への直接的な薬剤処理のみならず薬剤の移植前育苗箱処理あるいは移植時側条施用による病害虫防除を可能とする優れた薬剤即ち、優れた薬効を示し、且つ薬害のない薬剤の開発が強く望まれている。

また、下記の殺菌剤がイネいもち病あるいはイネ紋枯病の防除活性を有することは既に知られている。例えば、(Z)-2'-メチルアセトフェノン-4, 6-ジメチルピリミジン-2-イルヒドラゾン(フェリムゾン)、4, 5, 6, 7-テトラクロルフタリド(フサライド)、3-アルキルオキシ-1, 2-ベンゾイソチアゾール-1, 1-ジオキシド(プロベナゾール)、ジイソプロピル-1, 3-ジチオラン-2-イリデン-マロネート(イソプロチオラン)、カスガマイシン塩酸塩(カスガマイシン)、O-エチル-S, S-ジフェニルジチオホスフェート(エジフェンホス)、O, O-ジイソプロピル-S-ベンジルチオホスフェート(イプロベンホス)、5-メチル-1,

全性あるいは作物に対する薬害等の問題があることにより使用場面、使用回数等が限られる結果必ずしも満足すべき殺虫効果をあげているとはいえない。特に、最近従来の各種薬剤に対して感受性が低下した害虫、例えばわが国の水稻場面における有機リン剤及びカーバメート剤に対して抵抗性を有するツマグロヨコバイやウンカ類が出現し、これら害虫の防除技術の確立が強く要請されている。

同様な状況は殺菌剤の分野についても認められ、特に、最近水稻のいもち病病原菌あるいは稻紋枯病病原菌が従来の殺菌剤に対して感受性が低下したため防除が困難となり、これら病原菌の防除技術の確立が強く要請されている。

更に、近年これら害虫の防除についてもいわゆる低コスト化が強く要請され、少ない処理回数、少ない投下量で高い防除効果をあげる必要があり、これらの要請に応じ得る薬剤の開発が要請されている。

又、近年、わが国の水稻栽培技術の一つとして、

2, 4-トリアゾロ[3, 4-b]ベンゾチアゾール(トリシクラゾール)等はイネいもち病等の防除剤として、また例えば、バリダマイシンA(バリダマイシン)、 $\alpha$ ,  $\alpha$ ,  $\alpha$ -トリフルオロ-3-イソプロポキシ-0-トルアニリド(フルトラン)、3'-イソプロポキシ-2-メチルベンズアニリド(メプロニル)、1-(4-クロロベンジル)-1-シクロベンチル-3-フェニル尿素(ベンシクリン)等はイネ紋枯病等の防除剤としてペスティサイドマニュアル(The Pesticide Manual 第8版 1987年 The British Crop Protection Council 発行)等にそれぞれ記載されている。

## (ハ) 発明が解決しようとする課題

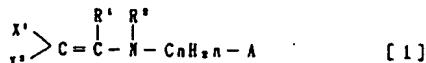
しかしながら、上記の公知の殺虫化合物及び殺菌化合物の作用は、それぞれ単独では殺虫効果もしくは殺菌効果のいずれかの効果を示すのみであり、病原菌による病害と害虫による被害を同時に防除することはできない。一方、本発明者らは、下記式[1]の不飽和アミン類またはその塩が殺虫

剤として有効なことを見出し、特許出願した(特願昭63-192383号)。この不飽和アミン類のより有効な利用を検討する中で、上記の公知の殺菌化合物との組合せを研究した結果、両者の単独使用では得られない協力的な殺虫殺菌効果が得られ、かつ、毒性面でも満足し得るものであることを見出した。

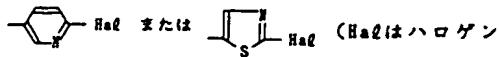
(二) 課題を解決するための手段

本発明によれば、

(1) 式[1]



[式中、 $X'$ 、 $X''$ の1つは電子吸引基を他は水素原子または電子吸引基を、 $R'$ は窒素原子を介する基を、 $R''$ は水素原子または炭素、窒素もしくは酸素原子を介する基を、 $n$ は0、1または2を、 $A$ は複素環基または環状炭化水素基を示す。但し、 $R'$ が $\beta-N$ -ビロリジノエチルアミノでかつ $R''$ が水素原子である時、 $A$ は式



原子を示す)で表わされる基を示す。]

で表わされる $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩の少なくとも1つと、

- (2) (Z)-2'-メチルアセトフェノン-4、6-ジメチルピリミジン-2-イルヒドラゾン(フェリムゾン)、
- 4、5、6、7-テトラクロルフタリド(フサライド)、
- 3-アルキルオキシ-1、2-ベンゾイソチアゾール-1、1-ジオキシド(プロベナゾール)、ジイソプロピル-1、3-ジチオラン-2-イリデン-マロネート(イソプロチオラン)、カスガマイシン塩酸塩(カスガマイシン)、O-エチル-S、S-ジフェニルジチオホスフェト(エジフェンホス)、O、O-ジイソプロピル-S-ベンジルチオホスフェート(イソプロベンホス)。

5-メチル-1、2、4-トリアブロ[3、4-d]ベンゾチアゾール(トリシクラゾール)、バリダマイシンA(バリダマイシン)、 $\alpha$ 、 $\alpha$ 、 $\alpha$ -トリフルオロ-3'-イソプロポキシ-0-トルアニリド(フルトラニル)、3'-イソプロポキシ-2-メチルベンズアニリド(メプロニル)、1-(4-クロロベンジル)-1-シクロペニル-3-フェニル尿素(ベンシクロン)等からなる群から選ばれた少なくとも1種の化合物とを含有することを特徴とする農園芸用殺虫殺菌組成物が提供される。

前記式[1]の $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩に前記の公知殺菌剤を配合した本発明による殺虫殺菌組成物の殺虫活性およびまたは殺菌活性は、それぞれ単独の活性化合物の効果の和より明らかに大であり優れた協力作用を発揮し、優れた速効性と残効性を有する。

ことに、本発明による殺虫殺菌組成物は、農業用作物の病害虫(病害および害虫)を防除するこ

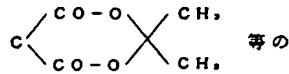
とを目的として施用することにより、例えば水稻の重要な害虫である半翅目害虫のツマグロヨコバイやウンカ類(例えばヒメトビウンカ、トビイロウンカ)や鞘翅目害虫のイネミズゾウムシ、イネドロオイムシや水稻の重要な病害菌であるイネいもち病菌あるいはイネ紋枯病菌に対して各々単独の活性化合物のみの場合より低濃度で協力的な殺虫殺菌活性を示し、且つ優れた速効性と残効性を示す。

(以下余白)

上記式[1]中、 $X'$ 、 $X''$ の1つは電子吸引基を有する水素原子または電子吸引基を示し、 $X'$ 、 $X''$ で表わされる電子吸引基としては、たとえばシアノ、ニトロ、アルコキシカルボニル(たとえばメトキシカルボニル、エトキシカルボニル等の $C_{1-3}$ アルコキシカルボニル)、ヒドロキシカルボニル、 $C_{1-3}$ アリール-オキシカルボニル(たとえばフェノキシカルボニル等)、複素環オキシカルボニル(複素環基としては下記のもの等が用いられ、たとえばビリジルオキシカルボニル、チエニルオキシカルボニル等)、たとえばハロゲン等で置換されていてもよい $C_{1-3}$ アルキルスルホニル(たとえばメチルスルホニル、トリフルオロメチルスルホニル、エチルスルホニル等)、アミノスルホニル、ジ- $C_{1-3}$ アルコキシホスホリル(たとえばジエトキシホスホリル等)、たとえばハロゲン等で置換されていてもよい $C_{1-3}$ アシル(たとえばアセチル、トリクロロアセチル、トリフルオロアセチル等)、カルバモイル、 $C_{1-3}$ アルキルスルホニルチオカルバモイル(たとえばメチルスルホニルチオカルバモイル等)等が用いられる。

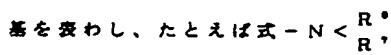
$C_{1-3}$ アリール-カルボニル(たとえばベンゾイル等)、アルコキシカルボニル(たとえばメトキシカルボニル、エトキシカルボニル等の $C_{1-3}$ アルコキシカルボニル)、 $C_{1-3}$ アリール-オキシカルボニル(たとえばフェノキシカルボニル等)、複素環オキシカルボニル(複素環基としては下記のもの等が用いられ、たとえばフリルオキシカルボニル等)、 $C_{1-3}$ アリールスルホニル(たとえばフェニルスルホニル等)、アルキルスルホニル(たとえばメチルスルホニル等の $C_{1-3}$ アルキルスルホニル)、ジアルコキシホスホリル(たとえばジエトキシホスホリル等のジ- $C_{1-3}$ アルコキシホスホリル)、アルコキシ(たとえばメトキシ、エトキシ等の $C_{1-3}$ アルコキシ)、ヒドロキシ、アミノ、ジアルキルアミノ(たとえばジメチルアミノ、ジエチルアミノ等のジ- $C_{1-3}$ アルキルアミノ)、アシルアミノ(たとえばホルミルアミノ、アセチルアミノ、プロピオニルアミノ等の $C_{1-3}$ アシルアミノ)、アルコキシカルボニルアミノ(たとえばメトキシカルボニルアミノ等の $C_{1-3}$ アルコキシカルボニル)等が用いられる。

ルバモイル等)等が用いられる。 $X'$ 、 $X''$ の1つがたとえばフッ素、塩素、臭素、ヨウ素等のハロゲン原子を示してもよく、 $X'$ と $X''$ が結合して隣接炭素と共にたとえば



環を形成していてもよい。式  $\frac{X'}{X''} > \text{C} =$  で示される基の好ましい例は、たとえば $\text{O}_2\text{NCH} =$  等である。

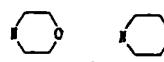
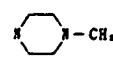
上記式[1]中、 $R'$ は窒素原子を介する



で表わされる基等が用いられる。ここにおいて $\text{R}''$ は水素原子、アルキル(たとえばメチル、エチル、n-プロピル、i-プロピル、n-ブチル、i-ブチル、n-ヘキシル等の $C_{1-3}$ アルキル)、 $C_{1-3}$ アリール(たとえばフェニル等)、アラルキル(たとえばベンジル等の $C_{1-3}$ アラルキル)、複素環基(たとえば下記のもの、具体的にはビリジル等)、 $C_{1-3}$ アシル(たとえばホルミル、アセチル、プロピオニル等)、

アミノ)、アルキルスルホニルアミノ(たとえばメチルスルホニルアミノ等の $C_{1-3}$ アルキルスルホニルアミノ)、ジアルコキシホスホリルアミノ(たとえばジエトキシホスホリルアミノ等のジ- $C_{1-3}$ アルコキシホスホリルアミノ)、 $C_{1-3}$ アラルキルオキシ(たとえばベンジルオキシ等)、アルコキシカルボニルアルキル(たとえばメトキシカルボニルメチル等の $C_{1-3}$ アルコキシカルボニル- $C_{1-3}$ アルキル)等を示し、 $R'$ は水素原子、1~3個の置換基(たとえばヒドロキシ、メトキシ等の $C_{1-3}$ アルコキシ、フッ素等のハロゲン、ジメチルアミノ等のジ- $C_{1-3}$ アルキルアミノ、i-プロピルチオ、n-プロピルチオ等の $C_{1-3}$ アルキルチオ、アセチルアミノ等の $C_{1-3}$ アシルアミノ、メチルスルホニルアミノ等の $C_{1-3}$ アルキルスルホニルアミノ、トリメチルシリル等のトリ- $C_{1-3}$ アルキルシリル、たとえばハロゲン等で置換されていてもよいビリジルまたはチアゾリル等)を有していてもよいアルキル(たとえばメチル、エチル等の $C_{1-3}$ アルキル)、シクロアルキル(たとえばシクロ

ヘキシル等のC<sub>6</sub>～シクロアルキル), アルケニル(たとえばビニル, アリル等のC<sub>2</sub>～アルケニル), シクロアルケニル(たとえばシクロヘキセニル等のC<sub>6</sub>～シクロアルケニル)またはアルキニル(たとえばエチニル等のC<sub>2</sub>～アルキニル)等を示す。さらに、R' と R'' は結合して隣接する窒素原子と共に、たとえば



等の

5ないし6員の環状アミノ基を示してもよい。

R' で示される窒素原子を介する基の好みい例は、たとえば(たとえば上記R', R'' で記載したごときアルキル, アリール, アラルキル, 複素環基, アシル, アルコキシカルボニル, アリールオキシカルボニル, 複素環オキシカルボニル, アリールスルホニル, アルキルスルホニル, ジアルコキシホスホリル, シクロアルキル, アルケニル, シクロアルケニル, アルキニル等が)置換していくてもよいアミノ(特にジーC<sub>2</sub>～アルキルアミノ, N-C<sub>2</sub>～アルキル

えはシクロペンチル, シクロヘキシル等のC<sub>5</sub>～シクロアルキル), C<sub>6</sub>～アリール(たとえばフェニル等), アラルキル(たとえばベンジル等のC<sub>6</sub>～アラルキル等), 炭素原子に結合する複素環基(たとえば下記のもの等で、具体的には3～または4-ビリジル基等)等が用いられ、これらの基は1ないし3個の置換基(たとえばメチルチオ, エチルチオ等のC<sub>1</sub>～アルキルチオ, メトキシ, エトキシ等のC<sub>1</sub>～アルコキシ, メチルアミノ, ジメチルアミノ等のモノまたはジーC<sub>1</sub>～アルキルアミノ, メトキシカルボニル, エトキシカルボニル等のC<sub>1</sub>～アルコキシカルボニル, メチルスルホニル, エチルスルホニル等のC<sub>1</sub>～アルキルスルホニル, フッ素, 塩素, 真素, ヨウ素等のハロゲン, アセチル等のC<sub>1</sub>～アシル, ベンゾイル, フェニルスルホニル, ピリジル等)を有してもよい。R' で示される窒素原子を介する基としては、たとえば上記R' で述べたごときもの等が用いられる。R' で示される酸素原子を介する基としては、たとえばアルコキシ(たとえばメトキシ, エトキシ等のC<sub>1</sub>～

-N-ホルミルアミノ等のジ置換アミノ, モノ-C<sub>1</sub>～アルキルアミノ等のモノ置換アミノ, 無置換のアミノ),(たとえば下記R' で記載したごときアルキル, アシル, アルコキシカルボニル, アルキルスルホニル, ジアルコキシホスホリル等が)置換していくてもよいヒドロジノ,(たとえば下記R' で記載したごときアルキル, アラルキル等が)置換していくてもよいヒドロキシアミノ等である。具体的には、式 -N<sup>R</sub><sub>1</sub><sup>2</sup> (R<sup>1</sup> 及び R<sup>2</sup> は前記と同意義を示す) で表わされる基等がR' として選用される。

R' は水素原子または炭素、窒素または酸素原子を介する基を示す。R' で示される炭素原子を介する基としては、たとえばC<sub>1</sub>～アシル(たとえばホルミル、アセチル、プロピオニル等)、アルキル(たとえばメチル、エチル、n-ブロピル、i-ブロピル、n-ブチル、i-ブチル、sec-ブチル等のC<sub>1</sub>～アルキル), アルケニル(たとえばビニル、アリル等のC<sub>2</sub>～アルケニル), シクロアルキル(たとえばシクロヘキシル、シクロヘキシカルボニル等のC<sub>6</sub>～シクロアルキル)

アルコキシ), シクロアルコキシ(たとえばシクロヘキシカルボニル等のC<sub>6</sub>～シクロアルコキシ), アルケニルオキシ(たとえばビニルオキシ, アリルオキシ等のC<sub>1</sub>～アルケニルオキシ), シクロアルケニルオキシ(たとえばシクロヘキセニルオキシ等のC<sub>6</sub>～シクロアルケニルオキシ), アルキニルオキシ(たとえばエチニルオキシ等), C<sub>2</sub>～アリールオキシ(たとえばフェノキシ等), 複素環基としては下記のもの等が用いられ、たとえばチエニルオキシ), 水酸基などが用いられ、これらは1～3個の置換基(たとえばフッ素, 塩素, 真素等のハロゲン, フェニル等)を有してもよい。R' の好みい例は、炭素、窒素または酸素原子を介する基であって、たとえばホルミル、(たとえば上記で述べたC<sub>1</sub>～アルキルチオ, C<sub>1</sub>～アルコキシ, モノまたはジーC<sub>1</sub>～アルキルアミノ, C<sub>1</sub>～アルコキシカルボニル, C<sub>1</sub>～アルキルスルホニル, フッ素, 塩素等のハロゲン, アセチル, ベンゾイル, フェニルスルホニル, ピリジル等が)置換していくてもよいC<sub>1</sub>～アルキル(特にメチル, エチル等

のC<sub>1</sub>～アルキル等),置換していくてもよいアミノ(たとえば上記R<sup>1</sup>で述べたごとき置換していくてもよいアミノ等),(たとえば上記のC<sub>1</sub>～アルキル,C<sub>2</sub>～シクロアルキル,C<sub>2</sub>～アルケニル,C<sub>2</sub>～シクロアルケニル,C<sub>2</sub>～アルキニル,C<sub>2</sub>～アリール,複素環基等が)置換していくてもよい水酸基(特にメトキシ等のC<sub>1</sub>～アルコキシ)等である。

nは0、1または2を示す。従って、式(I)の  
 $-C_{n}H_{2n-1}$ は単結合、 $-CH_{2}-$ 、 $-CH_{2}CH_{2}-$ 、  
 $CH_{3}$ 、  
 $-CH-$ を示すが、単結合または $-CH_{2}-$ が  
 常用される。

Aは複素環基(たとえば下記のもの等、特に下記の置換基(i),(iv),(vii),(x vi),(x L vii)等の1ないし3個が置換していくてもよい複素環基等が用いられ、具体的には3-ビリジル,6-クロロ-3-ビリジル,6-メトキシ-3-ビリジル,6-メチル-3-ビリジル,6-ブロモ-3-ビリジル,6-フルオロ-3-ビリジル,2-クロロ-5-チアゾリル等の置換していくてもよいビリジルまたはチアゾリル等である。Aで示される複素環基の好みの例は、たとえば3-ビリジル,4-ビリジル,6-クロロ-3-ビリジル,6-ブロモ-3-ビリジル,6-フルオロ-3-ビリジル,2-クロロ-5-チアゾリル等である。Aで示される環状炭化水素基の好みの例は、たとえばp-クロロフェニル等のハロゲノフェニル等である。

上記X<sup>1</sup>、X<sup>2</sup>、R<sup>1</sup>、R<sup>2</sup>、R<sup>3</sup>、R<sup>4</sup>、Aの定義におけるアルキル,シクロアルキル,アルケニル,シクロアルケニル,アルキニル,アリール,アラルキル,複素環基,環状炭化水素基としてはたとえば下記のもの等を用いることができ、これらの基はまた1～5個の置換基たとえば下記の(i)～

(L ii)等を有していくてもよい。

アルキルとしては、炭素数1～20のものが好みしく、炭素数1～8のものがより好みしい。該アルキルは、直鎖状のものでもよいし、分枝状のものでもよい。該アルキルの具体例としては、たとえばメチル,エチル,プロピル,イソプロピル,ブチル,イソブチル,sec-ブチル,tert-ブチル,ベンチル,ヘキシル,ヘプチル,オクチル,ノニル,2-エチルヘキシル,デシル,ウンデシル,ドデシル,トリデシル,テトラデシル,ペンタデシル,ヘキサデシル,オクタデシル,ノナデシル,エイコシルなどが用いられる。

シクロアルキルとしては炭素数3～6のものが好みしく、その例としてはたとえばシクロプロピル,シクロブチル,シクロベンチル,シクロヘキシルなどが用いられる。

アルケニルとしては、炭素数2～6のものが好みしい。該アルケニルの具体例としては、たとえば、ビニル,アリル(allyl),イソプロペニル,メタリル,1,1-ジメチルアリル,2-ブテンyl,3-

ブテニル,2-ベンテニル,4-ベンテニル,5-

ヘキセニルなどが用いられる。

シクロアルケニルとしては、炭素数3～6のものが好みしく、その具体例としては、たとえば、1-シクロプロペニル,2-シクロプロペニル,1-シクロブテニル,2-シクロブテニル,1-シクロベンテニル,2-シクロベンテニル,3-シクロベンテニル,1-シクロヘキセニル,2-シクロヘキセニル,3-シクロヘキセニル,1,3-シクロヘキサジエン-1-イル,1,4-シクロヘキサジエン-1-イル,1,3-シクロベンタジエン-1-イル,2,4-シクロベンタジエン-1-イルなどが用いられる。

アルキニルとしては、炭素数2～6のものが好みしく、その具体例としては、たとえば、エチニル,プロパルギル,2-ブチニル-1-イル,3-ブチニル-1-イル,3-ブチニル-2-イル,1-ベンチニル-3-イル,3-ベンチニル-1-イル,4-ベンチニル-2-イル,3-ヘキシン-1-イルなどが用いられる。

アリールとしては、たとえばフェニル、ナフチルなどが用いられる。

アラルキルとしては、たとえばベンジル、フェニルエチル、ナフチルメチルなどが用いられる。

複素環基としては、たとえば酸素原子、硫黄原子、窒素原子などのヘテロ原子を1～5個含む5～8員環またはその縮合環などが挙げられ、その具体例としては、たとえば2-または3-チエニル、2-または3-フリル、2-または3-ピロリル、2-、3-または4-ピリジル、2-、4-または5-オキサゾリル、2-、4-または5-チアゾリル、3-、4-または5-ピラゾリル、2-、4-または5-イミダゾリル、3-、4-または5-イソオキサゾリル、3-、4-または5-イソチアゾリル、3-または5-(1,2,4-オキサジアゾリル)、1,3,4-オキサジアゾリル、3-または5-(1,2,4-チアジアゾリル)、1,3,4-チアジアゾリル、4-または5-(1,2,3-チアジアゾリル)、1,2,5-チアジアゾリル、1,2,3-トリアゾリル、1,2,4-トリアゾリル、1H-ま

環状炭化水素基としては、たとえばシクロプロピル、シクロブチル、シクロヘキシル、シクロヘキシル等のC<sub>3</sub>～シクロアルキル、1-シクロプロペニル、2-シクロブテニル、1-シクロヘキセニル、2-シクロヘキセニル、1,3-シクロヘキサジエン-1-イル等のC<sub>4</sub>～シクロアルケニル、フェニル、ナフチル等のC<sub>5</sub>～アリール等が用いられる。

(i) C<sub>3</sub>～アルキル、たとえばメチル、エチル、プロピル、イソプロピル、ブチル、イソブチル、sec-ブチル、tert-ブチルなどが用いられる。

(ii) C<sub>4</sub>～シクロアルキル、たとえばシクロプロピル、シクロブチル、シクロヘキシル、シクロヘキシルなどが用いられる。

(iii) C<sub>5</sub>～アリール、たとえばフェニル、ナフチルなどが用いられる。

(iv) C<sub>3</sub>～アルコキシ、たとえばメトキシ、エトキシ、プロポキシ、イソプロポキシ、ブトキシ、tert-ブトキシなどが用いられる。

(v) C<sub>3</sub>～シクロアルキルオキシ、たとえばシ

たは2H-テトラゾリル、N-オキシド-2-、3-または4-ピリジル、2-、4-または5-ピリミジニル、N-オキシド-2-、4-または5-ピリミジニル、3-または4-ピリダジニル、ピラジニル、N-オキシド-3-または4-ピリダジニル、ベンゾフリル、ベンゾチアゾリル、ベンゾオキサゾリル、トリアジニル、オキソトリアジニル、テトラゾロ[1,5-b]ピリダジニル、トリアゾロ[4,5-b]ピリダジニル、オキソイミダジニル、ジオキソトリアジニル、ピロリジニル、ビペリジニル、ピラニル、チオピラニル、1,4-オキサジニル、モルホリニル、1,4-チアジニル、1,3-チアジニル、ビペラジニル、ベンゾイミダゾリル、キノリル、イソキノリル、シンノリニル、フタラジニル、キナゾリニル、キノキサリニル、インドリジニル、キノリジニル、1,8-ナフチリジニル、ブリニル、ブテリジニル、ジベンゾフランニル、カルバゾリル、アクリジニル、フェナントリジニル、フェナジニル、フェノチアジニル、フェノキサジニルなどが用いられる。

クロプロピルオキシ、シクロベンチルオキシ、シクロヘキシルオキシなどが用いられる。

(vi) C<sub>3</sub>～アリールオキシ、たとえばフェノキシ、ナフチルオキシなどが用いられる。

(vii) C<sub>3</sub>～アラルキルオキシ、たとえばベンジルオキシ、2-フェネチルオキシ、1-フェネチルオキシなどが用いられる。

(viii) C<sub>3</sub>～アルキルチオ、たとえばメチルチオ、エチルチオ、プロピルチオ、ブチルチオなどが用いられる。

(ix) C<sub>3</sub>～シクロアルキルチオ、たとえばシクロプロピルチオ、シクロベンチルチオ、シクロヘキシルチオなどが用いられる。

(x) C<sub>3</sub>～アリールチオ、たとえばフェニルチオ、ナフチルチオなどが用いられる。

(xi) C<sub>3</sub>～アラルキルチオ、たとえばベンジルチオ、2-フェネチルチオ、1-フェネチルチオなどが用いられる。

(xii) モノC<sub>3</sub>～アルキルアミノ、たとえばメチルアミノ、エチルアミノ、プロピルアミノ、イソブ

ロビルアミノ、ブチルアミノ、イソブチルアミノ、  
tert-ブチルアミノなどが用いられる。

(x iii)ジC<sub>1-10</sub>アルキルアミノ、たとえばジメチルアミノ、ジエチルアミノ、ジプロビルアミノ、ジブチルアミノ、N-メチル-N-エチルアミノ、N-メチル-N-ブチルアミノなどが用いられる。

(x iv)C<sub>1-10</sub>シクロアルキルアミノ、たとえばシクロプロビルアミノ、シクロペンチルアミノ、シクロヘキシルアミノなどが用いられる。

(x v)C<sub>1-10</sub>アリールアミノ、たとえばアニリノなどが用いられる。

(x vi)C<sub>1-10</sub>アラルキルアミノ、たとえばベンジルアミノ、2-フェニチルアミノ、1-フェニチルアミノなどが用いられる。

(x vii)ハロゲン、たとえばフッ素、塩素、臭素、ヨウ素が用いられる。

(x viii)C<sub>1-10</sub>アルコキシカルボニル、たとえばメトキシカルボニル、エトキシカルボニル、プロポキシカルボニル、イソプロポキシカルボニル、ブト

カノイルオキシ、ドデカノイルオキシ、トリデカノイルオキシ、テトラデカノイルオキシ、ペンタデカノイルオキシなどが用いられる。

(x x iv)置換基を有していてもよいカルバモイル、たとえばカルバモイル、N-メチルカルバモイル、N,N-ジメチルカルバモイル、N-エチルカルバモイル、N,N-ジエチルカルバモイル、N-フェニルカルバモイル、ビロリジノカルバモイル、ビペリジノカルバモイル、ビペラジノカルバモイル、モルホリノカルバモイル、N-ベンジルカルバモイルなどが用いられる。

(x x v)置換基を有しているカルバモイルオキシ、たとえばN-メチルカルバモイルオキシ、N,N-ジメチルカルバモイルオキシ、N-エチルカルバモイルオキシ、N-ベンジルカルバモイルオキシ、N-フェニルカルバモイルオキシなどが用いられる。

(x x vi)C<sub>1-10</sub>アルカノイルアミノ、たとえばホルミルアミノ、アセトアミド、プロピオニアミド、

キシカルボニル、tert-ブトキシカルボニル、イソブトキシカルボニルなどが用いられる。

(x ix)C<sub>1-10</sub>アリールオキシカルボニル、たとえばフェノキシカルボニルなどが用いられる。

(x x)C<sub>1-10</sub>シクロアルキルオキシカルボニル、たとえばシクロプロビルオキシカルボニル、シクロペンチルオキシカルボニル、シクロヘキシルオキシカルボニルなどが用いられる。

(x xi)C<sub>1-10</sub>アラルキルオキシカルボニル、たとえばベンジルオキシカルボニル、1-フェニチルオキシカルボニル、2-フェニチルオキシカルボニルなどが用いられる。

(x xii)C<sub>1-10</sub>アルカノイル、たとえばホルミル、アセチル、プロピオニル、ブチリル、ビバロイルなどが用いられる。

(x x iii)C<sub>1-10</sub>アルカノイルオキシ、たとえばホルミルオキシ、アセトキシ、ブチリルオキシ、ビバロイルオキシ、ペンタノイルオキシ、ヘキサノイルオキシ、ヘプタノイルオキシ、オクタノイルオキシ、ノナノイルオキシ、デカノイルオキシ、ウンデ

ブチリルアミドなどが用いられる。

(x x vii)C<sub>1-10</sub>アリールカルボニルアミノ、たとえばベンズアミドなどが用いられる。

(x x viii)C<sub>1-10</sub>アルコキシカルボニルアミノ、たとえばメトキシカルボニルアミノ、エトキシカルボニルアミノ、ブトキシカルボニルアミノ、tert-ブトキシカルボニルアミノなどが用いられる。

(x x ix)C<sub>1-10</sub>アラルキルオキシカルボニルアミノ、たとえばベンジルオキシカルボニルアミノ、4-メトキシベンジルオキシカルボニルアミノ、4-ニトロベンジルオキシカルボニルアミノ、4-クロロベンジルオキシカルボニルアミノなどが用いられる。

(x x x)置換スルホニルアミノ、たとえばメタシスルホニルアミノ、エタンスルホニルアミノ、ブタンスルホニルアミノ、ベンゼンスルホニルアミノ、トルエンスルホニルアミノ、ナフタレンスルホニルアミノ、トリフルオロメタシスルホニルアミノ、2,2,2-トリフルオロメタシスルホニルアミノなどが用

いられる。

(x x xi)複素環基、窒素原子、酸素原子、硫黄原子を1～5個を含む環状基であって、たとえばピロリジニル、2-または3-ピロリル、3-, 4-または5-ピラゾリル、2-, 4-または5-イミダゾリル、2-または3-フリル、2-または3-チエニル、2-, 4-または5-オキサゾリル、3-, 4-または5-イソオキサゾリル、3-, 4-または5-イソチアゾリル、2-, 4-または5-チアゾリル、ピペリジニル、2-, 3-または4-ピリジル、ピペラジニル、ピリミジニル、ピラニル、テトラヒドロピラニル、テトラヒドロフリル、インドリル、キノリル、1, 3, 4-オキサジアゾリル、チエノ[2, 3-d]ピリジル、1, 2, 3-チアジアゾリル、1, 3, 4-チアジアゾリル、1, 2, 3-トリアゾリル、1, 2, 4-トリアゾリル、1, 3, 4-トリアゾリル、テトラゾリル、4, 5-ジヒドロ-1, 3-ジオキソリル、テトラゾロ[1, 5-b]ピリダジニル、ベンゾチアゾリル、ベンゾオキサゾリル、ベンゾイミダゾリル、ベンゾチエニルなどが用いられる。

(x x x v)C<sub>1-10</sub>アルキルスルホニルオキシ、たとえばメタンスルホニルオキシ、エタンスルホニルオキシ、ブタンスルホニルオキシなどが用いられる。

(x x x vi)C<sub>1-10</sub>アリールスルホニルオキシ、たとえばベンゼンスルホニルオキシ、トルエンスルホニルオキシなどが用いられる。

(x x x vii)ジ-C<sub>1-10</sub>アリールホスフィノチオイルアミノ、たとえばジフェニルホスフィノチオイルアミノなどが用いられる。

(x x x viii)置換基を有してもよいチオカルバモイルチオ、たとえばチオカルバモイルチオ、N-メチルチオカルバモイルチオ、N, N-ジメチルチオカルバモイルチオ、N-エチルチオカルバモイルチオ、N-ベンジルチオカルバモイルチオ、N, N-ジベンジルチオカルバモイルチオ、N-フェニルチオカルバモイルチオなどが用いられる。

(x x x ix)シリルオキシ、たとえばトリメチルシリルオキシ、t-ブチルジメチルシリルオキシ、t-ブチルジフェニルシリルオキシ、ジメチルフェ

られる。

(x x xi)複素環チオ、複素環オキシ、複素環アミノまたは複素環カルボニルアミノ、上記の複素環基(x x xi)がそれぞれ硫黄原子、酸素原子、窒素原子またはカルボニルアミノ基に結合した基が用いられる。

(x x x iii)ジ-C<sub>1-10</sub>アルキルホスフィノチオイルアミノ、たとえばジメチルホスフィノチオイルアミノ、ジエチルホスフィノチオイルアミノなどが用いられる。

(x x x iv)アルコキシイミノ、たとえばメトキシイミノ、エトキシイミノ、2-フルオロエトキシイミノ、カルボキシメトキシイミノ、1-カルボキシ-1-メチルエトキシイミノ、2, 2, 2-トリクロロエチルオキシカルボニルメトキシイミノ、1-(2, 2, 2-トリクロロエチルオキシカルボニル)-1-メチルエトキシイミノ、(2-アミノチアゾール-4-イル)メトキシイミノ、(1H-イミダゾール-4-イル)メトキシイミノなどが用いられる。

ニルシリルオキシなどが用いられる。

(x L)シリル、たとえばトリメチルシリル、t-ブチルジメチルシリル、t-ブチルジフェニルシリル、ジメチルフェニルシリルなどが用いられる。

(x L i)C<sub>1-10</sub>アルキルスルフィニル、たとえばメチルスルフィニル、エチルスルフィニル、プロピルスルフィニル、ブチルスルフィニルなどが用いられる。

(x L ii)C<sub>1-10</sub>アリールスルフィニル、たとえばフェニルスルフィニル、ナフチルスルフィニルなどが用いられる。

(x L iii)C<sub>1-10</sub>アルキルスルホニル、たとえばメタンスルホニル、エタンスルホニル、ブタンスルホニルなどが用いられる。

(x L iv)C<sub>1-10</sub>アリールスルホニル、たとえばベンゼンスルホニル、トルエンスルホニルなどが用いられる。

(x L v)C<sub>1-10</sub>アルコキシカルボニルオキシ、たとえばメトキシカルボニルオキシ、エトキシカルボニルオキシ、tert-ブロキシカルボニルオキシ

などが用いられる。

(x Lvi)C<sub>1-4</sub>ハロアルキル、たとえばトリフルオロメチル、1,1,2,2-テトラフルオロエチル、ジフルオロメチル、モノフルオロメチル、トリクロロメチル、ジクロロメチル、モノクロロメチルなどが用いられる。

(x Lvii)C<sub>1-4</sub>ハロアルキルオキシ、C<sub>1-4</sub>ハロアルキルチオ、C<sub>1-4</sub>ハロアルキルスルフィニルまたはC<sub>1-4</sub>ハロアルキルスルホニル、たとえば上記のC<sub>1-4</sub>ハロアルキル(x Lvi)がそれぞれ酸素原子、硫黄原子、スルフィニル基またはスルホニル基に結合した基などが用いられる。

(x Lviii)シアノ基、ニトロ基、水酸基、カルボキシル基、スルホン酸基およびホスホン酸基。

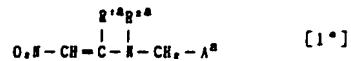
(x Lix)C<sub>1-4</sub>アルキルオキシスルホニル、たとえばメトキシスルホニル、エトキシスルホニル、ブトキシスルホニルなどが用いられる。

(L)C<sub>1-4</sub>アリールオキシスルホニル、たとえばフェノキシスルホニル、トリルオキシスルホニルなどが用いられる。

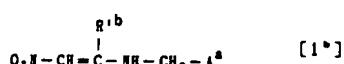
(Li)C<sub>1-4</sub>アラルキルオキシスルホニル、たとえばベンジルオキシスルホニル、2-フェニチルオキシスルホニル、1-フェニチルオキシスルホニルなどが用いられる。

(Lii)ジ-C<sub>1-4</sub>アルキルオキシホスホリル、たとえばジメトキシホスホリル、ジエトキシホスホリル、ジブトキシホスホリルなどが用いられる。

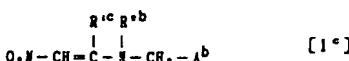
式[1]で表わされる $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩の好ましい例は、たとえば式



[式中、R<sup>1a</sup>はモノ-C<sub>1-4</sub>アルキルアミノ基、N-C<sub>1-4</sub>アルキル-N-ホルミルアミノ基またはアミノ基を、R<sup>2a</sup>はC<sub>1-4</sub>アルキル基またはC<sub>1-4</sub>アルコキシ基を、A<sup>8</sup>はクロロビリジル基を示す]で表わされる $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩、式



[式中、R<sup>1b</sup>はモノ-C<sub>1-4</sub>アルキルアミノ基またはN-C<sub>1-4</sub>アルキル-N-ホルミルアミノ基を、A<sup>8</sup>は前記と同意義を示す]で表わされる $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩、式



[式中、R<sup>1c</sup>はジ-C<sub>1-4</sub>アルキルアミノ基を、R<sup>2c</sup>は水素原子、ホルミルまたはC<sub>1-4</sub>アルキル基を、A<sup>8</sup>はビリジルまたはクロロビリジル基を示す]で表わされる $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩、式



[式中の記号は前記と同意義を示す]で表わされる

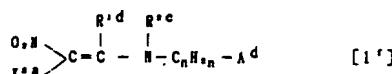
$\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩等である。

上記[1<sup>a</sup>]、[1<sup>b</sup>]、[1<sup>c</sup>]中、R<sup>1a</sup>及びR<sup>1b</sup>で示されるモノ-C<sub>1-4</sub>アルキルアミノ基は、たとえばモノメチルアミノ、モノエチルアミノ、モノ-n-プロピルアミノ、モノ-i-プロピルアミノ、モノ-n-ブチルアミノ、モノ-i-ブチルアミノ、モノ-n-ヘキシルアミノ等であり、好ましくはたとえばモノメチルアミノ、モノエチルアミノ等のモノ-C<sub>1-4</sub>アルキルアミノ等である。R<sup>2a</sup>及びR<sup>2b</sup>で示されるN-C<sub>1-4</sub>アルキル-N-ホルミルアミノ基は、たとえばN-メチル-N-ホルミルアミノ、N-エチル-N-ホルミルアミノ、N-n-プロピル-N-ホルミルアミノ、N-i-ブチル-N-ホルミルアミノ、N-n-ヘキシル-N-ホルミルアミノ等であり、好ましくはたとえばN-メチル-N-ホルミルアミノ、N-エチル-N-ホルミルアミノ等のN-C<sub>1-4</sub>アルキル-N-ホルミルアミノ等である。R<sup>1c</sup>で示されるジ-C<sub>1-4</sub>アル

キルアミノ基は、たとえばジメチルアミノ、N-エチル-N-メチルアミノ、ジエチルアミノ、ジ-*n*-プロピルアミノ、ジ-*i*-プロピルアミノ、ジ-*n*-ブチルアミノ、ジ-*i*-ブチルアミノ、ジ-*n*-ペンチルアミノ、ジ-*i*-ペンチルアミノ、ジ-*n*-ヘキシルアミノ等であり、好ましくはたとえばジメチルアミノ、N-エチル-N-メチルアミノ、ジエチルアミノ等のジ-C<sub>1-6</sub>アルキルアミノ等である。R<sup>1a</sup>及びR<sup>1c</sup>で示されるC<sub>1-6</sub>アルキル基は、たとえば上記R<sup>1</sup>で述べたもの等であり、好ましくはたとえばメチル、エチル等である。R<sup>1b</sup>で示されるC<sub>1-6</sub>アルコキシ基は、たとえば上記R<sup>1</sup>で述べたもの等であり、好ましくはメトキシ、エトキシ等である。A<sup>a</sup>及びA<sup>b</sup>で示されるクロロビリジル基は、たとえば2-クロロ-3-ビリジル、4-クロロ-3-ビリジル、5-クロロ-3-ビリジル、6-クロロ-3-ビリジル、3-クロロ-4-ビリジル等であり、好ましくはたとえば6-クロロ-3-ビリジル等である。A<sup>b</sup>で示

それぞれ水素、低級アルキル基、ハロゲン化低級アルキル基またはC<sub>1-6</sub>アシル基を、nは前記と同意義を示す。]で表わされるα-不飽和アミン類またはその塩、

式

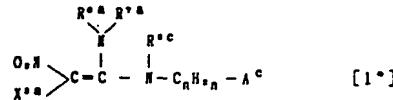


[式中、X<sup>1a</sup>は水素原子、C<sub>1-6</sub>アルコキシカルボニルまたはC<sub>1-6</sub>アルキルスルホニルチオカルバモイルを、R<sup>1d</sup>はアミノ、モノーまたはジ-C<sub>1-6</sub>アルキルアミノ、N-C<sub>1-6</sub>アルキル-N-C<sub>1-6</sub>アシルアミノ、C<sub>1-6</sub>アラルキルアミノ、ハロゲノチアゾリル-C<sub>1-6</sub>アルキルアミノまたはC<sub>1-6</sub>アルコキシ-C<sub>1-6</sub>アルキルアミノを、R<sup>1c</sup>は水素原子、C<sub>1-6</sub>アシル、C<sub>1-6</sub>アルキル、モノーまたはジ-C<sub>1-6</sub>アルコキシ-C<sub>1-6</sub>アルキル、C<sub>1-6</sub>アラルキル、モノーまたはジ-C<sub>1-6</sub>アルキルアミノまたはC<sub>1-6</sub>アルコキシを、A<sup>d</sup>はハロゲン原子、C<sub>1-6</sub>アルキルまたはC<sub>1-6</sub>アルコキシで置換されていてよい3-または4-ビリジル、ピラジニルまたは5-チアゾリルを示し、R<sup>1b</sup>及びR<sup>1c</sup>は

されるビリジルは、3-ビリジル、4-ビリジル等であり、好ましくは3-ビリジルである。

また、式[1]のα-不飽和アミン類またはその塩の代表的なものとしては、たとえば

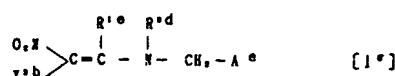
式



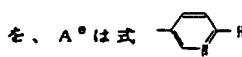
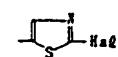
[式中、X<sup>1a</sup>は水素原子、C<sub>1-6</sub>アルコキシカルボニルまたはC<sub>1-6</sub>アルキルスルホニルチオカルバモイルを、R<sup>1c</sup>は水素原子、C<sub>1-6</sub>アシル、C<sub>1-6</sub>アルキル、モノーまたはジ-C<sub>1-6</sub>アルコキシ-C<sub>1-6</sub>アルキル、C<sub>1-6</sub>アラルキル、モノーまたはジ-C<sub>1-6</sub>アルキルアミノまたはC<sub>1-6</sub>アルコキシを、A<sup>d</sup>はハロゲン原子、C<sub>1-6</sub>アルキルまたはC<sub>1-6</sub>アルコキシで置換されていてよい3-または4-ビリジル、ピラジニルまたは5-チアゾリルを示し、R<sup>1b</sup>及びR<sup>1c</sup>は

ルキルアミノまたはC<sub>1-6</sub>アルコキシを、nは0、1または2を、A<sup>d</sup>はハロゲン原子、C<sub>1-6</sub>アルキルまたはC<sub>1-6</sub>アルコキシで置換されていてよい3-または4-ビリジル、ピラジニルまたは5-チアゾリルを示す。]で表わされるα-不飽和アミン類またはその塩、

式



[式中、X<sup>1b</sup>は水素原子またはC<sub>1-6</sub>アルキルスルホニルチオカルバモイルを、R<sup>1c</sup>はアミノ、モノーまたはジ-C<sub>1-6</sub>アルキルアミノまたはN-C<sub>1-6</sub>アルキル-N-ホルミルアミノを、R<sup>1d</sup>は水素原子、C<sub>1-6</sub>アルキルまたはC<sub>1-6</sub>アシル

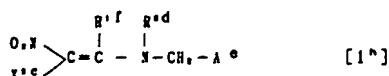
を、A<sup>d</sup>は式  または 

(Halはハロゲン原子を示す)で表わされる基を

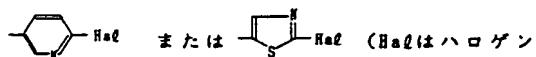
示す。]で表わされる  $\alpha$ -不飽和アミン類または

その塩、

式

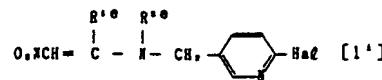


[式中、  $\text{X}^{\circ \text{c}}$  は水素原子またはメチルスルホニルチオカルバモイルを、  $\text{R}^{\circ \text{f}}$  はアミノ、メチルアミノ、ジメチルアミノまたは  $\text{N}$ -メチル- $\text{N}$ -ホルミルアミノを、  $\text{R}^{\circ \text{d}}$  は水素原子、ホルミルまたは  $\text{C}_{1-4}$  アルキルを、  $\text{A}^{\circ}$  は式



上記式 [1<sup>a</sup>]～[1<sup>i</sup>] 中、  $\text{X}^{\circ \text{a}}$ 、  $\text{X}^{\circ \text{b}}$  及び  $\text{X}^{\circ \text{c}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{d}}$ 、  $\text{R}^{\circ \text{e}}$  及び  $\text{R}^{\circ \text{f}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{g}}$ 、  $\text{R}^{\circ \text{h}}$  及び  $\text{R}^{\circ \text{i}}$  で示される基、  $\text{A}^{\circ \text{c}}$ 、  $\text{A}^{\circ \text{d}}$  及び  $\text{A}^{\circ \text{e}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{g}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{h}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{i}}$  で示される基は、それぞれ上記  $\text{X}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$ 、  $\text{A}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$  で述べたもの等が用いられる。

式



[式中、  $\text{R}^{\circ \text{e}}$  はアミノ、モノ-またはジ- $\text{C}_{1-4}$  アルキルアミノまたは  $\text{N}$ - $\text{C}_{1-4}$  アルキル- $\text{N}$ -ホルミルアミノを、  $\text{R}^{\circ \text{e}}$  は  $\text{C}_{1-4}$  アルキルまたはホルミルを、  $\text{Hal}$  はハロゲン原子を示す。]で表わされる  $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩等がある。

上記式 [1<sup>a</sup>]～[1<sup>i</sup>] 中、  $\text{X}^{\circ \text{a}}$ 、  $\text{X}^{\circ \text{b}}$  及び  $\text{X}^{\circ \text{c}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{d}}$ 、  $\text{R}^{\circ \text{e}}$  及び  $\text{R}^{\circ \text{f}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{g}}$ 、  $\text{R}^{\circ \text{h}}$  及び  $\text{R}^{\circ \text{i}}$  で示される基、  $\text{A}^{\circ \text{c}}$ 、  $\text{A}^{\circ \text{d}}$  及び  $\text{A}^{\circ \text{e}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{g}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{h}}$  で示される基、  $\text{R}^{\circ \text{i}}$  で示される基は、それぞれ上記  $\text{X}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$ 、  $\text{A}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$  で述べたもの等が用いられる。

一般式 [1] で表わされる化合物またはその塩は、類似公知方法により製造することができる他、特願昭63-192383号に記載の方法により製造するこ

ともできる。

(以下余白)

化合物 [1] が遊離形で得られた場合にこれを常套手段を用いて塩を形成させてもよく、また、塩として得られたものを常套手段を用いて遊離形としてもよい。化合物 [1] は、  $\text{X}^{\circ}$ 、  $\text{X}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$  および  $\text{A}$  部分にカルボキシル基、スルホ基、ホスホノ基などの酸性基を有している場合、塩基との塩を形成させてもよく、該塩基としてはたとえばナトリウム、カリウム、リチウム、カルシウム、マグネシウム、アンモニアなどの無機塩基、たとえばビリジン、コリジン、トリエチルアミン、トリエタノールアミンなどの有機塩基などが用いられる。また  $\text{X}^{\circ}$ 、  $\text{X}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$ 、  $\text{R}^{\circ}$  および  $\text{A}$  部分にアミノ基、置換アミノ基などの塩基性基を有している場合は酸付加塩を形成していてもよく、かかる酸付加塩としては塩酸塩、臭化水素酸塩、ヨウ化水素酸塩、硝酸塩、硫酸塩、リン酸塩、酢酸塩、安息香酸塩、マレイン酸塩、フマル酸塩、コハク酸塩、酒石酸塩、クエン酸塩、シュウ酸塩、グリオキシル酸塩、アスパラギン酸塩、メタンスルホン酸塩、メタンジスルホン酸塩、1,2-エタン

ジスルホン酸塩、ベンゼンスルホン酸塩などが用いられる。

本発明による活性物質組合せに於いて使用される式[1]の $\alpha$ -不飽和アミン類の代表的な化合物としては、

1-[N-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)-N-メチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)-N-メチル]アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-(N-ホルミル-N-メチル)-2-ニトロエチレン、

1-[N-(2-クロロ-5-チアゾリルメチル)]

1-[N-(2-クロロ-5-チアゾリルメチル)-N-メチル]アミノ-1-(N-ホルミル-N-メチル)アミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(2-クロロ-5-チアゾリルメチル)-N-エチル]アミノ-1-(N-ホルミル-N-メチル)アミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-プロモ-3-ピリジルメチル)-N-メチル]アミノ-1-(N-ホルミル-N-メチル)アミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-プロモ-3-ピリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-(N-ホルミル-N-メチル)アミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-プロモ-3-ピリジルメチル)-N-ホルミル]アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)-N-(2,2,2-トリフルオロエチル)]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(2-クロロ-5-チアゾリルメチル)-N-ホルミル]アミノ-1-ジメチルアミノ-

-N-エチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(2-クロロ-5-チアゾリルメチル)]アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-プロモ-3-ピリジルメチル)-N-メチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)-N-ホルミル]アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-フルオロ-3-ピリジルメチル)-N-メチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-エチル-N-(6-フルオロ-3-ピリジルメチル)]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

1-[N-(6-プロモ-3-ピリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、

2-ニトロエチレン、  
1-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン、  
1-アミノ-1-[N-(6-クロロ-3-ピリジルメチル)-N-メチル]アミノ-2-ニトロエチレン等。

上記 $\alpha$ -不飽和アミン類またはその塩及びそれらの殺虫剤としての使用は、本発明者らにより特願昭63-192383号に記載されている。

また、本発明による活性物質組合せに於いて使用される一方の殺菌剤として下記の化合物が挙げられる。

(2)(Z)-2-メチルアセトフェノン-4,6-ジメチルピリミジン-2-イルヒドラゾン(フェリムゾン)、

4, 5, 6, 7-テトラクロルフタリド(フライド)、

3-アルキルオキシ-1, 2-ベンゾイソチアゾール-1, 1-ジオキシド(プロベナゾール)、ジイソプロピル-1, 3-ジチオラン-2-イ

リデン-マロネート(イソプロチオラン)、  
カスガマイシン塩酸塩(カスガマイシン)、  
O-エチル-S,S-ジフェニルジチオホスフェート(エジフェンホス)、  
O,O-ジイソプロピル-S-ベンジルチオホスフェート(イプロベンホス)、5-メチル-1,2,4-トリアゾロ[3,4-b]ベンゾチアゾール(トリシクラゾール)、  
バリダマイシンA(バリダマイシン)、  
 $\alpha$ , $\alpha$ , $\alpha$ -トリフルオロー-3-イソプロポキシ-O-トリアニリド(フルトラニル)、  
3'-イソプロポキシ-2-メチルベンズアニリド(メプロニル)、  
1-(4-クロロベンジル)-1-シクロベンチル-3-フェニル尿素(ベンシクロン)等。

本発明による活性物質組合せの一方の成分である上記殺菌剤は既に公知であり、例えば上記ペスティサイドマニュアル等に記載されている。

次に、本発明による活性物質組合せに於ける各群の活性化合物の重量比は一般に、式[1]の $\alpha$

例えば、昆虫類では特に水田の半翅目害虫であるツマグロヨコバイ(*Nephrotettix cincticeps*)、ウンカ類(トビイロウンカ(*Nilaparvata lugens*)、セジロウンカ(*Sogatella furcifera*)、ヒメトビウンカ(*Laodelphax striatellus*))等、鱗翅目害虫であるニカメイガ(*Chilo suppressalis*)、コブノメイガ(*Cnaphalocrocis medinalis*)、フタオビコヤガ(*Xaranga aenescens*)等及び鞘翅目害虫であるイネミズゾウムシ(*Lissorhoptrus oryzophilus*)、イネゾウムシ(*Echinocnemus squameus*)、イネドロオイムシ(*Oulema oryzae*)等、果樹、蔬菜、茶等の園芸作物の鱗翅目害虫であるコナガ(*Plutella maculipennis*)、モンシロチョウ(*Pieris brassicae*)、ヨトウガ(*Mamestra brassicae*)、チャノコカクモンハマキ(*Adoxophyes sp.*)、チャノホソガ(*Caloptilia theivora*)等、半翅目害虫であるアブラムシ類(モモアカアブラムシ(*Myzus persicae*)、ワタアブラムシ(*Aphis gossypii*)、リンゴアブラムシ(*Aphis*

-不飽和アミン類またはその塩の活性化合物群の活性化合物1重量部当り、(2)の公知殺菌剤の活性化合物群の活性化合物を、0.1~100重量部、好みしくは0.5~50重量部使用できる。

本発明による活性化合物組合せは、優れた殺虫殺菌活性を示し、茎葉散布、水中または水面施用、土壤表面への灌注処理、土壤混和処理、あるいは育苗箱処理等により使用することができる。

本発明による活性物質組合せは各々の活性物質が単独で施用される場合より低薬量で強力な殺虫殺菌活性を示すため、作物に対する薬害が完全に回避でき、従来の殺虫剤または殺菌剤において、速効性、残効性、浸透移行性等のバランスを欠いたり、また殺虫または殺菌効果面では優れていても温血動物や魚類に対する毒性、あるいは有用昆虫や天敵等に対する安全性あるいは作物に対する薬害等の問題があることにより使用に制限があったような場面でも使用できる。

本発明の殺虫殺菌組成物は下記のごとき病害虫(病害および害虫)を防除することができる。

poni)等)、カイガラムシ類(ヤノネカイガラムシ(*Unaspis yanoensis*)、クワコナカイガラムシ(*Pseudococcus comstocki*)等)、オンシツコナジラミ(*Trialeurodes vaporariorum*)、チャノミドリヒメヨコバイ(*Empoasca onukii*)等、アザミウマ目害虫であるチャノキイロアザミウマ(*Scirtothrips dorsalis*)、ミナミキイロアザミウマ(*Thrips palmi*)、等、鞘翅目害虫であるコロラドイモハムシ(*Leptinotarsa decemlineata*)、ニジュウヤホシントウムシ(*Epilachna vigintioctopunctata*)等が挙げられる。

また、植物病原菌としては例えば、古生菌(*Archimicetes*)、藻菌(*Phycomycetes*)、子囊菌(*Ascomycetes*)、担子菌(*Basidiomycetes*)、不完全菌(*Fungi Imperfecti*)等を挙げることができるが、上記植物病害類の殺菌スペクトラムの代表例としては、例えばイネいもち病菌(*Pyricularia oryzae*)、イネ紋枯病菌(*Pellicularia sakii*)、野菜類苗枯病の病原菌の一種であるリゾクトニア・ソラニ(*Rhizoctonia solani*)等

が挙げられる。

本発明の活性化合物組合せは、それぞれ(1)またはその塩及び(2)の成分を共に含有する一般農薬のとり得る混合製剤の形態、例えば乳剤、水和剤、粉剤、粒剤、旋剤、噴霧剤等の形態にすることができる、また用時に(1)またはその塩及び(2)の成分を混合可能な通常の製剤形態、例えば乳剤、水和剤等にすることができる。

これらの製剤は上記(1)またはその塩または(2)の活性成分を単独または混合して適当な液体の担体に溶解させるか分散させ、または適当な固体担体と混合するか吸着させ、必要に応じ例えば乳化剤、懸濁剤、展着剤、浸透剤、湿润剤、粘着剤、安定剤等を添加し公知の方法で製造することができる。

製剤中の活性成分全部の含有割合は使用目的によって異なるが、乳剤、水和剤等は5~70重量%程度が適当であり、粉剤としては0.1~10重量%が適当であり、粒剤としては0.5~10重量%が適当であるが、使用目的によっては、これらの濃度

アセトニトリル、プロピオニトリル等)等の溶媒が適当であり、これらは1種または2種以上を適当な割合で混合して適宜使用することができる。

固体担体(希釈・增量剤)としては、植物性粉末(例えば、乳糖、大豆粉、タバコ粉、小麦粉、木粉等)、鉱物性粉末(例えば、カオリン、ベントナイト、酸性白土等のクレイ類、タルク、雲母粉等のシリカ類等)、珪藻土、炭酸カルシウム、アルミナ、硫酸粉末、活性炭等が用いられ、これらは1種または2種以上を適当な割合で混合使用することができる。

乳化剤、展着剤、浸透剤、分散剤等として使用される界面活性剤としては、必要に応じて石鹼類、ポリオキシエチレンアルキルアリルエーテル類(例えば、ノイゲン イー・エー(E・A)142:第一工業製薬(株)製、ノナール:東邦化学(株)製)、アルキル硫酸塩類(例えば、エマール10、エマール40:花王(株)製)、アルキルスルホン酸塩類(例えば、ネオゲン、ネオゲンT:第一工業製薬(株)製、ネオベレックス:花王(株)製)、ポリエ

を適宜変更してもよい。乳剤、水和剤等は使用に際して、水などで適宜希釈増量(例えば100~10,000倍)して散布する。

使用する液体担体(溶剤)としては、例えば水、アルコール類(例えば、メチルアルコール、エチルアルコール、ローブロビアルコール、イソブロビアルコール、エチレングリコール等)、ケトン類(例えば、アセトン、メチルエチルケトン等)、エーテル類(例えば、ジオキサン、テトラヒドロフラン、エチレングリコールモノメチルエーテル、プロビレングリコールモノメチルエーテル等)、脂肪族炭化水素類(例えば、ケロシン、灯油、燃料油等)、芳香族炭化水素類(例えば、ベンゼン、トルエン、キシレン、ソルベントナフサ、メチルナフタレン等)、ハロゲン化炭化水素類(例えば、ジクロロメタン、クロロホルム、四塩化炭素等)、酸アミド類(例えば、ジメチルホルムアミド、ジメチルアセトアミド等)、エステル類(例えば、酢酸エチル、酢酸ブチル、脂肪酸グリセリンエステル等)、ニトリル類(例えば、

チレングリコールエーテル類[例えば、ノニポール85、ノニポール100、ノニポール160:三洋化成(株)製]、多価アルコールエステル類[例えば、トウイーン20、トウイーン80:花王(株)製]等の非イオン系及びアニオン系界面活性剤が適宜用いられる。

本発明の活性化合物組合せは、それらの商業上、有用な製剤及び、それらの製剤によって調製された使用形態で、他の活性化合物、例えば殺虫剤、殺菌剤、殺ダニ剤、殺線虫剤、殺カビ剤、成長調整剤との混合剤として使用することもできる。

かくして得られる本発明の殺虫殺菌組成物は、毒性が極めて少なく安全で、優れた農薬である。そして、本発明の殺虫殺菌組成物は、従来の殺虫、殺菌剤と同様の方法で用いることができ、その結果従来品に比べて優れた効果を発揮することができる。たとえば、本発明の殺虫殺菌組成物は、対象の病害虫に対してたとえば育苗箱処理、作物の茎葉散布、虫体散布、水田の水中施用あるいは土壤処理などにより使用することができる。そして、

その施用量は、施用時期、施用場所、施用方法等に応じて広範囲に変えることができるが、一般的にはヘクタール当たり活性成分（化合物（1）またはその塩及び公知殺菌剤）が0.3g～3000g好ましくは50g～1000gとなるように施用することが望ましい。また、本発明の殺虫殺菌組成物が水和剤である場合には、活性成分の最終濃度が0.1～1000ppm好ましくは10～500ppmの範囲となるように希釈して使用すればよい。

次に実施例により本発明の内容を具体的に説明するが、本発明はこれのみに限定されるべきものではない。

【実施例】

実施例1

液剤の茎葉散布によるトビイロウカおよびイネいもち病に対する防除効果試験

溶剤：アセトン（3.5重量部）およびジメチルホルムアミド（3.5重量部）の混合液 7.0重量部  
乳化剤：多価アルコールエステル（トウィーン20；花王（株）製） 2.0重量部

試験方法：

直径9.0cmの塩化ビニール製ポットに植えられた播種32日後のイネに上記の活性化合物の所定濃度の水希釈液をスプレーガンを用いてスプレーチェンバー内で散布し、1日後にイネいもち病被害葉からイネいもち病原胞子を自然感染させ、温度25±2°、相対湿度100%の接種室温内に2日間保った後、温度25±2°のガラス温室内に移し、5日後に株当たりの病斑面積歩合（%）を調査して罹病の程度を分類し、下式により防除率（%）を求めた。試験は2連制で行なった。

罹病の程度	病斑面積歩合（%）
0	0
0.5	2未満
1	2～5未満
2	5～10未満
3	10～20未満
4	20～40未満
5	40以上

防除率（%） = ( (無処理区の罹病度 - 処理区の

後掲第1表中の供試薬剤の欄に記載の活性化合物もしくは活性化合物単独の1.0重量部を上記乳化剤を含有する溶剤と混合し、その混合物を接着剤（グイン®）3000倍加用の水道水で所定の濃度まで希釈した。

①トビイロウカに対する試験（散布試験）

試験方法：

直径約11.3cmの塩化ビニール製ポットに植えられた草丈約30cmのイネ（移植20日後）にトビイロウカ3～4令幼虫を各ポット当たり20頭充接種し直径11cm、高さ6.7cmの透明塩化ビニール製のフィルムでつくられた円筒（上部開口部はゴースでおおった）をかぶせ、翌日予め調型した上記の活性化合物の所定濃度の水希釈液をスプレーガンを用いてポット当たり20ml開口部より散布し、25±1°Cのガラス恒温室におき、2日後の生残虫数を調べ、殺虫率 [ = ((供試頭数 - 生残虫数) / 供試頭数) × 100 ] を求めた。試験は2連制で行なった。

②イネいもち病に対する防除効果試験（散布試験）

罹病度） / (無処理区の罹病度) ) × 100

結果を以下に示す。

（以下余白）

第1表

供試薬剤	有効成分濃度 (ppm)	トビイロウンンカ殺虫率 (%)	イネいもち病防除率 (%)
No.1-(A)	5+20	100	100
No.1-(B)	5+20	100	100
No.1-(C)	5+10	100	100
No.2-(A)	5+20	100	100
No.2-(B)	5+20	100	100
No.2-(C)	5+10	100	100
No.3-(A)	5+20	100	100
No.3-(B)	5+20	100	100
No.3-(C)	5+10	100	100
No.4-(A)	5+20	100	100
No.4-(B)	5+20	100	100
No.4-(C)	5+10	100	100
No.5-(A)	5+20	100	100
No.5-(B)	5+20	100	100
No.5-(C)	5+10	100	100
No.1	5	100	0
No.2	5	100	0
No.3	5	100	0
No.4	5	100	0
No.5	5	100	0
(A)	20	0	90
(B)	20	0	90
(C)	10	0	80
無処理	-	0	0

註)

## 1. 本試験に使用した式[1]の化合物:

粒剤の育苗箱処理によるヒメトビウンカおよびイネいもち病に対する防除効果

## 供試薬剤の調製:

後掲第2表中の供試薬剤の欄に記載の活性化合物混合剤の6重量部もしくは活性化合物単独の2(はたは4)重量部、リグニンスルホン酸ナトリウム5重量部、にクレイを8.9重量部~9.3重量部を加えて総量を100重量部として粉碎混合し、少量の水を加えてよく練り合わせた後、押し出し造粒乾燥して粒剤を製造した。

## 試験方法:

水稻育苗箱に植えられた播種3週間後のイネ苗に箱当り5.0gの上記の各粒剤を散粒し、翌日直徑約11.3cmの塩化ビニール製ポットに移植し、25±1°Cのガラス温室内に放置した。移植3週間後にヒメトビウンカ幼虫(雌雄比は1:1)を各ポット当り20頭充接種し直徑11cm、高さ6.7cmの透明塩化ビニール製のフィルムでつくられた円筒(上部開口部はゴースでおおった)をかぶせ、2日後の生残虫数を調べ、殺虫率[=(供試頭数

化合物 No.1 : 1-[N-(6-クロロ-3-ビリジルメチル)-N-メチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン

化合物 No.2 : 1-[N-(6-クロロ-3-ビリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-(N-ホルミル-N-メチル)-2-ニトロエチレン

化合物 No.3 : 1-[N-(6-クロロ-3-ビリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン

化合物 No.4 : 1-[N-(2-クロロ-5-チアゾリルメチル)アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン

化合物 No.5 : 1-[N-(6-クロロ-5-チアゾリルメチル)-N-ホルミル]アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン

## 2. 本試験に使用した公知化合物:

化合物(A): フェリムゾン

化合物(B): トリシクラゾール

化合物(C): カスガマイシン

## 実施例2

生残虫数)/供試頭数)×100]を求めた。殺虫試験終了後のイネ(移植24日後にイネいもち病害葉からイネいもち病原菌を自然感染させ、温度25±2°C、相対湿度100%の接種室温に2日間保った後、温度25±2°Cのガラス温室内に移し、5日後に株当たりの病斑面積歩合(%)調査して罹病の程度を分類し、下式により防除率(%)を求めた。試験は各々2回実行した。

罹病の程度 病斑面積歩合(%)

0	0
0.5	2未満
1	2~5未満
2	5~10未満
3	10~20未満
4	20~40未満
5	40以上

防除率(%) = ((無処理区の罹病度-処理区の罹病度)/(無処理区の罹病度))×100

結果をまとめて以下に示す。

第2表

供試薬剤	有効成分濃度 (ppm)	ヒメトビウンカ殺虫率 (%)	イネいもち病防除率 (%)
No. 1+(A)	1.0+2.0	100	100
No. 1+(B)	1.0+2.0	100	100
No. 2+(A)	1.0+2.0	100	100
No. 2+(B)	1.0+2.0	100	100
No. 3+(A)	1.0+2.0	100	100
No. 3+(B)	1.0+2.0	100	100
No. 4+(A)	1.0+2.0	100	100
No. 4+(B)	1.0+2.0	100	100
No. 5+(A)	1.0+2.0	100	100
No. 5+(B)	1.0+2.0	100	100
No. 1	1.0	100	0
No. 2	1.0	100	0
No. 3	1.0	100	0
No. 4	1.0	100	0
No. 5	1.0	100	0
(A)	2.0	0	95
(B)	2.0	0	90
無処理	-	0	0

## 注)

1. 本試験に使用した式[1]の化合物：

化合物No. 1 : 1 - [N - (6 - クロロ - 3 - ピリジルメチル) - N - メチル] アミノ - 1 - メチルアミノ - 2 - ニトロエチレン

化合物No. 2 : 1 - [N - (6 - クロロ - 3 - ピ

2.0 : 花王(株)型 2.0重量部

後掲第3表中の供試薬剤の欄に記載の活性化合物混合剤もしくは活性化合物単独の1.0重量部を上記乳化剤を含有する溶剤と混合し、その混合物を展着剤(ダイン\*) 3000倍加用の水道水で所定の濃度まで希釈した。

## ①トビイロウンカに対する試験

## 試験方法：

直徑約11.3cmの塩化ビニール製ポットに植えられた草丈約30cmのイネ(移植20日後)にトビイロウンカ3~4令幼虫を各ポット当たり20頭宛接種し直徑11cm、高さ6.7cmの透明塩化ビニール製のフィルムでつくられた円筒(上部開口部をゴースでおおった)をかぶせ、翌日予め調製した上記の活性化合物の所定濃度の水希釈液をスプレーガンを用いてポット当たり20ml宛開口部より散布し、25±1℃のガラス恒温室におき、2日後の生存虫数を調べ、殺虫率[=(供試頭数-生存虫数)/供試頭数]×100]を求めた。試験は2連制で行なった。

リジルメチル) - N - エチル]アミノ - 1 - (N - ホルミル - N - メチル) - 2 - ニトロエチレン  
化合物No. 3 : 1 - [N - (6 - クロロ - 3 - ピリジルメチル) - N - エチル] アミノ - 1 - メチルアミノ - 2 - ニトロエチレン  
化合物No. 4 : 1 - [N - (2 - クロロ - 5 - チアゾリルメチル) アミノ - 1 - ジメチルアミノ - 2 - ニトロエチレン  
化合物No. 5 : 1 - [N - (6 - クロロ - 5 - チアゾリルメチル) - N - ホルミル] アミノ - 1 - ジメチルアミノ - 2 - ニトロエチレン

## 2. 本試験に使用した公知殺菌剤：

化合物(A) : トリシクラゾール

化合物(B) : プロベナゾール

## 実施例 3

液剤のイネ茎葉散布処理によるトビイロウンカおよびイネ紋枯病防除効果試験

溶剤：アセトン(3.5重量部)およびジメチルホ

ルムアミド(3.5重量部)の混合液 7.0重量部

乳化剤：多価アルコールエステル(トウイーン

## ②イネ紋枯病に対する防除効果試験

1/5000aの塩化ビニール製ポットに灌水状態で栽培された幼穂形成期のイネに予め調製した上記活性化合物の所定濃度の水希釈液をスプレーガンを用いてポット当たり100ml宛散布し、散布の翌日供試イネ植物体に株元に、ジャガイモ寒天培地で2日間培養した紋枯病菌を接種し、温度28~30℃、相対湿度95%以上の条件下で10日間放置して紋枯病を発病させた後、発病程度を調査し、下式により防除率(=(100-被害度))を求めた。試験2連制で行なった。

$$\text{被害度} = ((3n_3 + 2n_2 + n_1 + n_0) / 3N) \times 100$$

但し、

N : 全調査基数

n<sub>0</sub> : 無発病基数n<sub>1</sub> : 下位第1葉位葉鞘まで罹病した基数。n<sub>2</sub> : 下位第2葉位葉鞘まで罹病した基数。n<sub>3</sub> : 下位第3葉位以上まで罹病した基数。

結果をまとめて以下に示す。

第3表

供試薬剤	有効成分濃度 (ppm)	トビイロウンカ殺虫率 (%)	イネ紋枯病防除率 (%)
No.1+(A)	5+15	100	100
No.1+(B)	5+125	100	100
No.2+(A)	5+15	100	100
No.2+(B)	5+125	100	100
No.3+(A)	5+15	100	100
No.3+(B)	5+125	100	100
No.4+(A)	5+15	100	100
No.4+(B)	5+125	100	100
No.5+(A)	5+15	100	100
No.5+(B)	5+125	100	100
No.1	5	100	0
No.2	5	100	0
No.3	5	100	0
No.4	5	100	0
No.5	5	100	0
(A)	15	0	90
(B)	125	0	85
無処理	-	0	0

注)

1. 本試験に使用した一般式[1]の化合物:

化合物No.1 : 1-[N-(6-クロロ-3-ビリジルメチル)-N-メチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン

化合物No.2 : 1-[N-(6-クロロ-3-ビリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-(N-ホルミル-N-メチル)-2-ニトロエチレン

化合物No.3 : 1-[N-(6-クロロ-3-ビリジルメチル)-N-エチル]アミノ-1-メチルアミノ-2-ニトロエチレン

化合物No.4 : 1-[N-(2-クロロ-5-チアゾリルメチル)アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン

化合物No.5 : 1-[N-(6-クロロ-5-チアゾリルメチル)-N-ホルミル]アミノ-1-ジメチルアミノ-2-ニトロエチレン

2. 本試験に使用した公知殺菌剤:

化合物(A) : バリダマイシンA

化合物(B) : フルトラニル

上記第1, 2及び3表により、本発明の殺虫殺菌組成物は、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、イネいもち病及びイネ紋枯病に対して、各活性成分の単独使用に比べて協力的な優れた殺虫殺菌作用及び速効性と持続性を有することが立証される。

## 実施例4(水和剤)

実施例1に示された化合物No.1(5重量%)、化合物(A)(2.0重量%)、リグニスンルホン酸ナトリウム(5重量%)、ポリオキシエチレングリコールエーテル(ノニボール85%:5重量%)、ホワイトカーボン(10重量%)、水和剤用クレイ(5.5重量%)をよく混合して、水和剤を製造した。

## 実施例5(水和剤)

実施例3に示された化合物No.3(5重量%)、化合物(A)(1.5重量%)、ポリオキシエチレングリコールエーテル(ノニボール85%:5重量%)、ホワイトカーボン(10重量%)、水和剤用クレイ(6.0重量%)をよく混合して、水和剤を製造した。

## 実施例6(粉剤)

実施例1に示された化合物No.1(0.25重量%)、化合物(A)(2.0重量%)、ホワイトカーボン(5.0重量%)、クレイ(92.75重量%)をよく混合して、粉剤を製造した。

## 実施例7(粉剤)

実施例3に示された化合物No.3(0.25重量%)、化合物(A)(0.3重量%)、ホワイトカーボン(5.0重量%)、クレイ(94.45重量%)をよく混合して粉剤を製造した。

代理人弁理士野河信太郎  


第1頁の続き

⑤Int.Cl. <sup>5</sup>	識別記号	庁内整理番号
//(A 01 N 47/30		
43:78)		
(A 01 N 43/78		
43:54)		
(A 01 N 43/78		
37:08)		
(A 01 N 43/78		
43:16)		
(A 01 N 43/78		
33:08)		
(A 01 N 43/80		
43:78)		
(A 01 N 57/14		
47:30)		